

万国新話

其三

共五本

洋学文庫

文庫8

C 176

4



橋本氏
藏書印



蓋を飾りて。名は河内レサ至止と云ふ。此制度の及ぶ
 此蓋より國中の重蓋ありて。国王の外ハ
 みどり又祝ふ事紙ゆきさぶらゆあり。志は
 紙此を子とて。齊志く堂上より舞を。折節
 傍り人かうりれば。思ひの修めを祝弄し
 けり。時は國王ハ。穀劇を。見せ大に樂紙極む
 不。たらまら彼樂蓋の多紙ゆて大に驚き
 何者か。此を我主蓋紙怒り祝ふやとて。急か人
 をけり。志は是紙捕志む。官人等。いけり。り
 後堂より入。我務り。彼を紙捕つんとて。事字を

萬國新話

卷之三

三

此制度の及ぶ

有て。志るもかゝる振上紙がらことゆはの
 とありしれは。鍛工長叩頭して言中
 けり。波小友者ハ親族の子紙着取て。
 臣子とて。竹ふたりと。國王曰。志るも強
 汝子か。くの如く長大めして志るも強
 勇る。今日より我官中よ居て石付よ
 べしとて。やがて「ワナラ」を堂上よと名
 ぬけり。鍛工も内少憂を抱しつども。舟
 小ハ親善の氣は紙が。恩をぬして返
 出也。此段所綴ありし編を 史より「ワナラ」國

王小近侍とるるの僅に二三月。甚ふは近侍
 の國に合戦ありけるが。やがて此瓜哇國とも
 襲ひそりけぬ。國王「ワナラ」を軍將と
 て。戦場小向へし。ワナラに戦ハ必を務攻
 れば必抜て。敵兵紙追おふの事も。許多
 の州縣と攻取。糧多の賤宝を分ちて凱
 陣走りぬ。國王大よ喜び是よりして彼
 を寵もするの節目よ十陪せり。遂よ「ワナ
 ラ」に就りて万人を統る長として。ハテ
 イヤ々ラに都のの内「ワラセ」地名の北の側よ居

任せしむ。其格勢。此國の執政「アリヤバ」ヤク人各あもわし。ざりけり。此「アリヤバ」ヤクタイツテ。る者ハ。瓜哇國の諸臣多き。中より。取つけ貴重せし。子細ハ。元來國王の子あり。廢王の列る。れども。今群臣の長として。執政第一の人あり。る。志る。よ。ハ。ヤク。久ま。封と。都。返。國中の政令を。或日國王の御前。出。願く。ハ。國中の鍛工を。こ。て。我宅。呼集ち。一の軍器を製せんと欲す。

請ふ。父の國王許容あり。れ。ハ。ヤク。を。國中の鍛工を呼集ち。軍器あり。す。して。一の鉄室を造る。志む。志る。一日の内。功を終ん。を要す。是何故。小軍器を。制せ。て。此室。造る。と。ハ。ヤク。久。志く。不臣の心を懷き。父國王を弑して。おのれ。ハ。タイヤラ。の國王。と。欲。さ。ざ。り。故。機密の謀を。設けて。この室を。営む。あり。昨日。鉄。おの。外人の。一日の。

其ハ成龍也。シロメゾ有ける。既其室成
 けられ。バシヤク種々の珍宝成排列。牀
 帳枕机の如。金銀珠玉成りて飾り立。
 其の上名香敷品を具して。一室其薫ト
 満よりければ。此室入るハ恰天堂
 又坐する己ひをあせりける。バシヤク其ハ
 俗不修り終り。國王を我宅ニ招待せん
 を請ふ。王昂昨又驚成促して。彼宅ニ至
 せば。バシヤク練行杖首志て出迎ひ大宴
 成排。山海の珍味を盡しける。其ハ王を

といし。其陪従の諸臣。各款笑志て碎を極り
 昨。國王偶。庭上の新室成りて。バシヤク小間
 て曰。彼室ハ何の故ニ造りて。志ありと。バシヤク
 答て曰。彼室ハを比。長久寢室ニ造りて。不
 て。暑き昨。彼室小入。バシヤクを氣成生し。冷
 たり。其のハ乍暖。痛り。其のハ乍愈。飢
 其のハ乍飽。と。王駭てい。其の如き。其
 奇なり。我暫く入て試んと。即彼室ニ
 入り。バシヤク計。其の成。大に成。其
 手早。其の彼室の戸。成。其の四面。其

を積事山のぬくみして。一回は火代をりれ
 へ。煙天火野野めて燃上る。陪従の諸臣矢小
 驚といども。悉く「バンヤク」が猛威代思ふか。
 誰者く火中よ跑入り。王代救ふその一人も
 なくける。良ありて國王燔肉のぬくみ焼
 死し。さる代引出さる。バンヤクをを励ま
 していつて曰。凡人さる者。いさりの債と
 いども。借るそのハ必返さるといふ事
 あり。我知き此父國王のぬくみカラハング
 河の名のぬくみ投入られり。
此事系編不出る
 詳あり

今々の債代償ふたりとて遂は其屍を「カラ
 ハング」に投入しむ。陪従の臣下おさき中よ「シ
 ガンダ」といふ者。此席代恐び出。太子「ス
 ルーグ」の宮よ来り。大は號泣して事の扶を
 告。太子大に驚嘆し。たちどを召し宮中ま
 介の兵士代呼して「バンヤク」が宅へ馳向ふに。
 くと國中の若ども悉く「バンヤク」が威に靡
 き泣ひりぬむ。太子の兵卒殺し毎に故地
 四五日程の戦ひよ。近臣のこゝろ討死し。
 太子一人とどかりより。今ハもやねん

萬國新書 卷之三
次は東方より道をなみ公細くも只一人千磨
百粒を凌ぎてやうやくカリグニテイグと
しる縣よりこゝへ逃ぎ出りり。友よ一人の老
婆あり。名はヨイヤイランダカリグニテイグと
し。素より國王の妻ありて。太子「スース
ルーグ」は産する後人の嫁し。此所は住居を
あせり。太子先此老婆が素より好む。此老
の男は体や。程復讐のころは男のころ。肝
膽をこゝろ砕きりり。扱も「アリヤバレヤク」ハ父
國王は弒して後「パテイヤラ」に居住し

て自ら此哇國王と稱するよ。人敢て反く者予
し。此は志きるふ令はトし。程もあれ。太
子「スースルーグ」を偶宿せし。あるひは法
を以て扶助し。合力を有するのありハ。衆を九
族よ加ふべしとして。太子を採し。求むるは
衆密あり。ヨイヤイランダカリグニテイグ。或日用
変ありて「パテイヤラ」の都より出し。此制
れを以て一撃は吃し。慌々忙々衆は帰る。太
子よ志りくの中は法語り。且三人の兄弟「キヤ
イライサリ」「キヤイバアテル」「キヤイタムビ」

等と高依して。天子以逃れ去らん事を
馬のあど。「スースール」人々よ向ひて曰。今我
たとい鉄骨銅皮ありとも。一擲の人丈以て
可りや。バヤクが大軍小敵せん。おのひとも
ど。終に避て他邦よ赴き。師の至るを待べ
し。とて。即時よけ地を去んと。四人の者
頻よ別以惜みて。皆く去りて棄る。よ忍
ひど。彼是百人ぐりりの人を送へて。天子小
附流ひ。何を以て當と云る。もかく。とて
うとなく。落行り。かくて救日。以て歴行。幸

くして「クリームバン」と。この山の麓よ。若くは
人々此山よ。やまんと。行くか。嶮山
さうれば。木の根よ。岩頂よ。継り。身を漸
攀躋。もろ所よ。たも。ち。一陣の大風起り。雨
ハ益々。覆る。が。ぬ。木を抜。石。以て。電
光霹靂。おび。と。去。く。山。麓。も。碎。飛。天。も。破
る。と。ぐ。り。か。り。是。何。の。故。な。れ。バ。此。山。上。よ。一
人の妖婦あり。名を「ニヤイテヤン」ト。ウ。ン。ガ。ル。と
いふ。天下の妖怪悪鬼の都を統後。て。此。山。中。よ
隠れ。住。る。の。年。久。し。今。此。風。雨。雷。電。ハ。衆。の

妖怪等。「スースールーグ以下の人々。此山に入
る。被^レ妖婦^ノ告知^スんとして叫喚^スらるる等
あり。人々肝^ヲ腐^ル魂^ヲ飛^トて忙^シらるる甚^クなり。
何処^ニもなき一^ツ聲^ノの振^ル鈴^ノの音^ヲ響^クくと云
々々。忽^チ雷^ノの快^ク晴^ルなり。是より人々皆
勵^ミ。山の頂^ニ到^リて見^ルば「テヤンミン
の大木^{。本名形状未詳}。森々^{トシ}て生^キ繁^クなり。不^レ思^ハ夜^ヤ
甚^ク樹^ノの蔭^ノより。爰^ニ弦^ノの音^ヲを奏^スと。一^ツ羽^ノの令^ヲ
大^ニ驚^レれ悟^ミけり。太子^ハおのりらく予^ヲ弱^ク
て。い。此^ノ山^ニは「ニヤイテヤンミントウニガル」と

の山^ニ仙^女あり。此^ノ木^ニも。其^ノ仙^女の
隠^ルる所^ニ人^々と自言^シ自^ラ語^ル所^ニ。思^ハひ
々々。波^ノあり。大^ニ光^ヲ照^シ放^テ銀^ノの釘^ノ緑^ノ
を祀^リ。是^ノより。白^ク髪^ノの僊^女取^レ出^スり。
太子^ハおのり地上^ニ跪^テ曰^ク。大^ニ仙^ニ我^ハ「スースー
ルーグ。道^ノ長^クの所^ニ。困^ニ死^ス。て此^ノ所^ニ。来^レ
り。邪^ニしくハ教^ヲ代^ヘ垂^ルと。仙^女曰^ク。吾^ハ我^ハ汝^ハが来^リ
る。今^ハ汝^ハが兄^ノ弟^ニアリヤ。バンヤ
。一^ツ味^ノの勢^ヲは乗^リて威^ヲ推^シ甚^ク猛^クあり。更^ニに汝^ハ
々々。不^レ思^ハ。我^ハも亦^モ汝^ハが救^ムるを

得ぞ。然るともども後東の諸部は示さ
 ず。前ふあれ詳は是れ汝人。汝今此山
 孤去り。猶も路を東より取りて旅行せよ。汝
 殺日ありて。一椽の「ホーニマテイ」ヤシと名付
 木は見る事ありん。木の名称 其状未詳 其
 味ひは苦からん。其樹あり不_レ都を
 建べ。百神擁護の地なれ。父國王の讎言
 汝報らるることなき。子々孫々よ至るを永
 久に瓜哇國の王位は保つべ。然且も其
 我前過の事汝語り申せん。我はえ來汝

大叔母ありて。汝は父「デーインゲサリ」
 の女なり。我若かり。瓜哇國中の諸候容
 豹の美廉なり。我乞ひ。各ありて娶
 んと欲し。妻同らるる事なき。密
 よ千人の妻子と相約せり。若し依りて
 敢て衆人の妻同らうけん。若し依りて
 衆諸侯怒らば。遂は干戈に相
 合戦利ありて。雙親難く逢たむ一
 了。我は其時より此山より汝を
 積月を思ひて。是れ汝の若し

正と。語りゆきまふく。とらまら文離り
 老女の形は変じて。婬約より美婦人となる
 生り。其容姿実は純代無双にして嬌氣
 人より迫きり。女子其亦精神恍惚として正
 気なく。都て前後のより。辨せり一意は其
 負。貂におもひよりるを。抱擁し。手紙をて
 戯るる。忽然として又々。女の形はあれ
 ば。女子心始りて省悟し。大に愧大に愁地よ
 伏して。飛狐謝見。仙女曰。あえて疑るるや。あ
 き。りとして。此身は及りり道不棲人。あれを感ハ

老より安んず現ド。まゝハ稚き者とも。変化男
 となり女とあり。我ありまきあして。長小
 死するものなり。変化不測の術。狐は。我
 ハ是より。南海。ブランデに。つる山の南。コッ
 タ。小都。狐築き。万国世界。ふあ。り。新の
 妖怪。悪鬼の首領。とならん。大事を決し。
 大軍。狐出。せん。亦。汝必。我名。狐。呼ぶ。小
 きて。守護。か。ま。べ。く。此。地。を。祭。足
 せよ。と。未。然。狐。教。諭。する。の。掌。狐。指。が。ぬ。し。
 刃。ス。ール。グ。を。こ。し。や。じ。て。一。行。の。衆。人。

こころしく拜伏し。即ち仙女の命も去りし。東の方より路紙あり。仙女の教紙をひねりて。吾が紙分を紙行し。コリスルルに疲難を。一株の木下より憩息志りしが。地上より二三箇の菓実あり。是紙をふも甚熟し。採て食へば。其味ひ至て苦し。此より於て彼仙女の言紙をひねりて。叔父「ウイラサリ」に同けり。是ハ何の菓実也。此地ハ吾が領地也。ウイラサリに答て曰。此菓ハ「コテイヤ」ともいへり。まゝ此地ハ「アステイ」にともて。則ち「コ

イヤキラ」の屬縣ありて。汝が領地をきりて。されども「アリヤバ」に「コテイヤ」に紙押紙をてより。けまも彼賊臣の領地をきりて。コリスルルに此言紙をひねり。天より歡び地より喜びていしく。幸なりけり。是を分りて。大叔母の教も不し。我王業紙を奥に。地なり。速に都に建べし。やがて地名紙「コテイヤ」に改め。遂に此に都を築き。近邊の人民を募集し。前國王の旧恩紙を荷つる者。我もくと。

萬國新書 卷之三
馳集の程も幾くもなしくして数千の
軍兵を以てしりり。つゞや此野を懐
て。逆臣系氏一叛は亦込。父國王の
妄執を晴さんと。合戦の評儀もな
なり。去程は「左ングワナレハ」アリヤバ
ヤク國王を弑し。うらむか。ハ。己の領内
ハツセルの地も在り。道路もろくも隔る
る所。此大變は亦も知らし。其後
追々アリヤバヤクに逆意の以牙。左子
も其方を知り。其怒り骨髄を徹す。

今ハも也「ワナレ」が頼むべき君も左子もま
し。ま。此上ハ「バ」テイヤラレの都へ攻入
逆臣「ハ」ヤクを。つゞや。府は亦も亦も
討てが。忽ち曠野と。か。今のを念
を。と。た。ち。手。下。の。軍。兵。の。行
卒。不。日。は。都。へ。攻。上。り。夜。食。を。之。れ
息。も。継。ぎ。日。々。夜。々。血。戦。して。屢。勝
利。を。得。り。つゞや。寡。衆。小。敵。に。對
く。大。國。の。軍。兵。を。切。て。も。突。て。も。を
る。小。こ。を。中。く。一。時。は。取。挫。き。つゞや。

肺肝を摧き一が。此頃天子「スースール
 ーグ」コテイヤパイ止よ都を建。田好の
 士、招くとツより。取柄も、五あえんがて。
 昂味又馳系ト。スースールーグよ謁見
 ーりぬ。天子一、度ハ悲み。一度ハ悲び
 ーか、つらコナラは二千の兵を揚ひて
 「コテイヤキラ止よ進發せー」ハ。コバンヤク
 此由、紙サト、一も。逞兵を、とぐつて、追
 殺。合戦、數廻一して、兵、兵、遂よ勝
 利を得。敵兵、以、廢、一。大將、コ、ヤク

を擄と一。一、刀の、命、試、以、り、此、於
 て。スースールーグ、他日、の、誓、懐、一、味、よ、替、け、父
 國王、の、神、靈、以、慰、ら、る、り、以、得、と、り、志、よ
 ー、後、其、身、ハ、程、も、コ、テイ、ヤ、パイ、止、よ、都、城
 を、居、て、瓜、哇、國、王、と、稱、せ、ら、れ、コ、テイ、ヤ、キラ
 止、ハ、あ、る、牙、コ、シ、ゲ、ラ、ン、ア、リ、ヤ、バ、ヌ、ー、ラ、ル、止、よ、あ、い
 ー、是、を、治、め、一、ハ、三、人、の、叔、父、以、執、政、と
 ー。コ、ナ、ラ、止、よ、擄、ら、ふ、大、友、を、以、テ、一、其、弟、の
 官、職、盡、く、備、り、て、瓜、哇、國、全、く、平、均、
 新、國、王、の、德、化、よ、靡、き、後、の、け、り、其、後、年

を歴て。スースールグ之病は係りて神
去りぬ。其子ヨラフリアノムロワリニグバ
スサレ。是は嗣で瓜哇國王と稱せられけ
ばとて決りけり。

此一條ハヨターヒマススノードシカッピと
しる書中 瓜哇要録と云義あり 「ヤワーンセヒストリ
止とてハ一條瓜哇が友良庵前野達が
譯ししるあり。ヤワーンセヒストリ止ハ
瓜哇紀傳としる義あり。其總目録
よりハ第一條と書て其一二の條は脱

せり。故に起すの末歴は詳しきなり
瓜哇語ありき。

○竹鎗會 瓜哇

方輿勝覽の外國竹枝詞の註に云。此
國十月を春首とす。竹鎗の會といふ
有り。夫婦塔車よなして會ふに至り。夫
ハ偶をえりて各竹鎗を執妻ハ各二人
其の本棍を執て其中よま。轂を鳴り
號とし。鐘を交りしる合。其時二人
の妻。彼本棍をとりてその水を保て。那

刺那刺しんの子昂あきのそとめて退教たいきやうす。若突わつ殺ころす者ある時ハ國王より勝かちり者まじ余あとて金銭一箇いっかん死し者の家いへあふとて死しる者まじの妻つまハ勝かちり者まじを随まつて去さる者まじ。玉王ぎよわうも妃きも死しもよ。車くるま小乗せうじやうして會所かいじよより出でる者まじ。

○聖水せいすい 同上

此國の海灘かいだんよよき池いけ有あり。聖水せいすいと名なづく元もとの將しやう高興かうきやう史弼しひつ此國こく征せいむる時とき水みづよよ乞こむ。そそかからら天あま詔みことまみして禱いた祝いのちし。鏡かがみ詔みことま

地上ちじやうよ突き立たきば泉いづみ湧わぎて涌わぎて。我朝わが壺井うゑいの清水しみずと同日どうじつの法はふなる。

○巴且人はぢじん日本にっぽん漂着ひやうしやくの始末

巴且はぢハ大寬たいくわんの南みなみに南みなみりて天竺てんぢくより近ちかき島（たろ）。延宝八年五月十七日の夜日向ひなた此國こく（十八人じゅうはちにん家いへの異國いこく船ふね漂ひひき着ちり。夫おとこより好立こうたて月つき十八日じゅうはちにち。於王おの伊波い後ご出雲いずも中なかつ夜よを。濟陽せいやうへ送おくらる。別鎮べつちん臺たい牛うし也忠ちゆうた東門とうもん後ごのとらららら公こうみて十名じゅうな寺てら御菜園ごさいえんの門かど。唐造たうぞうの船ふね具ぐ紙し入いる者もの。武間ぶかん梁りやうよよ六む乃の比ひ小家せうかのとららへ

波漂客帆を紅毛の次友を
 くらと見。あつちの古人は命せられた。同
 せらうれど。些も云語をせざらん。何玉の
 人とも知ざりし。所茶種苗手入汲水野
 小たつつらるる。女是あつち男めて。手あ
 盥小あ瓜湛へ。小石を以て嶋紐をおく。篋の
 葉の舟は土偶人紙を案也。水は浮べえせられ
 ぐ。漂客ども合点して。指て嶋紐を解り。習
 けらぬ。まこと。方位を正し。日月星辰の
 形紙解りて。昼夜次分ち。船も船路を尋

セイダイアツク

二十二三歳程

スイモコムスリ

二十二三歳程

スイモシカラムナツク

三十二三歳程

病死

右十八人の肉色黄白あり。黒きあり。眼ハ亮
 なれども。剃髪志しき。乞みよ也。長嵩とて
 剃せしれども。背の毛ヲ五尺五寸。衣
 既ハ日中の風呂友の如し。
 中良葉。是ハ天竺
 あり。点する州ロに
 以彼有。冷気の物あり。木綿布子紙あり
 へられり。残らざる。紙紙技去り。袖をの襖
 又制して。若せしとあり。禪ハ幅七寸斗の

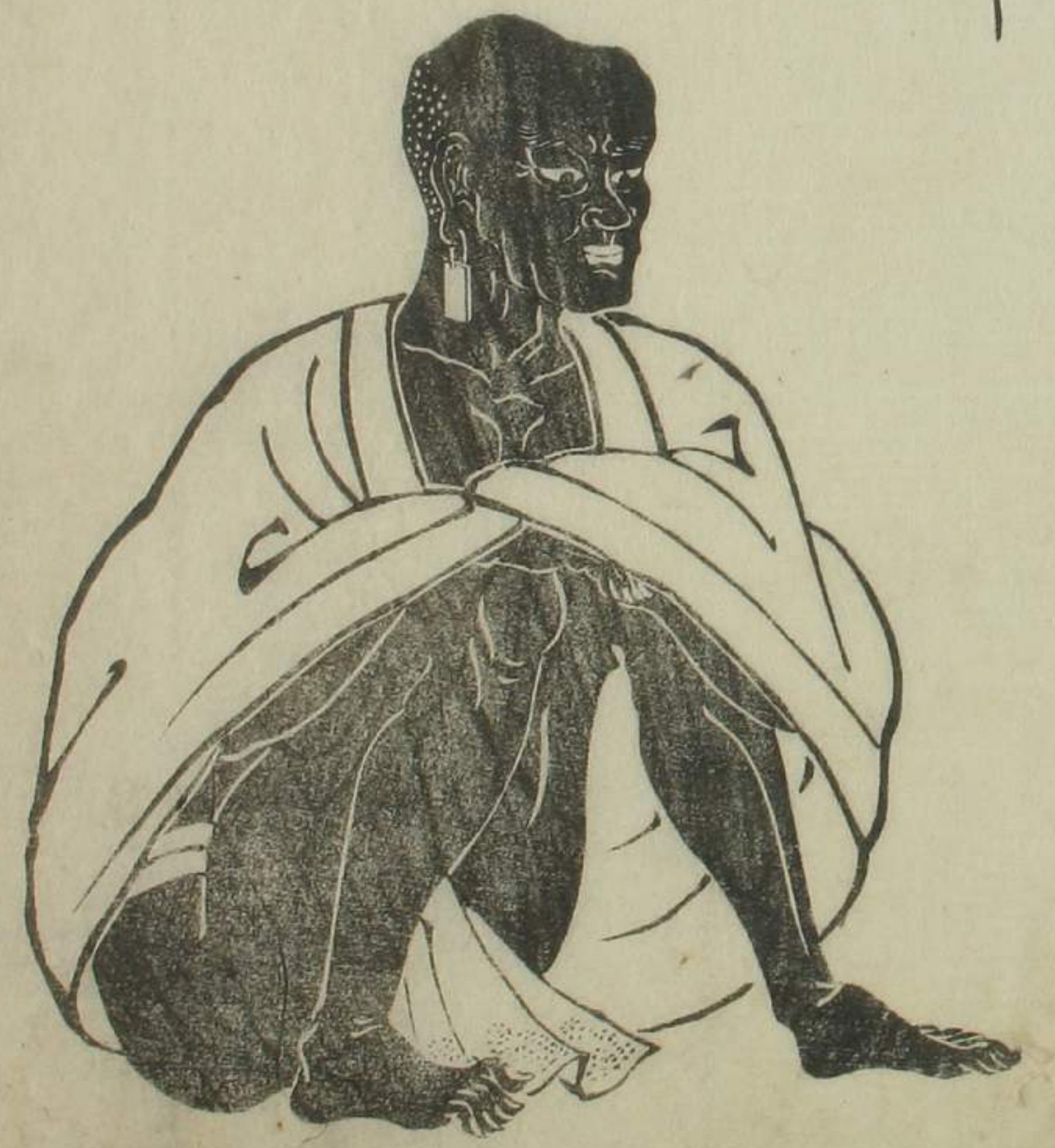
巴旦人之圖

耳より附るるれハ立山の廳
えいめそ呼出さるる外
切戸口
入時一を



十八まの殺字
書らるるを耳垂(附)
さむ何番の巴旦人
と呼そまを赤せ
られし一まん何

き七耳珠ニ環以
つる穴ありし



木綿めて。織るよまがひ糸にて種々の挿紙あり。唐山製の刀紙。佩煙草煙管。日本語と同一。文字有。横小書也。中良業の天竺より用ひりコレイ区文字なる一持渡りし。蜀黍の種紙。六月前。九月に至き。バニテ喰ふ。飯此禁法。日本と異なる。ふ。但し土鍋めて炊たり。徳意の命わたりて。死し。る。木をあらり。ね。は。焼め。して。小刀めて切り。水煮め。して。食ひり。菓子ふど。ある。ゆ。ま。人。殺。し。切。り。死。し。て。食ふ。或時ハ大本の枝へ。細繩めて罟紙を。

考紙。五。て。毛。を。引。み。煮。め。し。て。食。し。木。に。登。り。て。ハ。猿。の。如。く。海。を。入。り。六。務。の。如。し。寝。る。時。ハ。長。サ。二。尺。五。六。寸。横。を。尺。五。寸。なる。刺。物。の。箱。を。壁。に。立。を。示。紙。を。毛。を。を。睡。る。毎。日。お。ろ。紙。浴。九。月。の。比。小。い。う。り。て。も。文。子。傷。紙。用。び。し。し。と。然。巴。旦。人。も。返。き。死。す。
何事も崇福寺へ 残り六人あり。り。ね。を。結。
 星紅乞人を石出。此者在本國へ送る。を。い。て。一。連。お。後。さ。り。垂。人。畏。り。し。る。也。あ。て。同。年。九。月。出。船。の。節。回。航。し。て。出。帆。

志^ウけ^ウが。巴旦人とも在國へハ帰らざして。
 咬^ウ啗^ウ吧^ウめ^ウ カエ^ウバ^ウハ妻^ウ以^ウ具^ウ。一人ハ泥^ウ水^ウ通^ウ
 と^ウ多^ウ。陸^ウ王^ウ治^ウ者^ウの加^ウ工^ウとな^ウりし^ウる^ウ匠^ウ。
 年の加比丹言上セーとも。巴旦人の家^ウ
 不^ウ船^ウハ代^ウ銀^ウ百^ウ目^ウめ^ウえ^ウ拂^ウと^ウなる。長^ウ六^ウ間^ウ
 横^ウを^ウ丈^ウ五^ウ寸^ウ。高^ウめ^ウて^ウわ^ウげ^ウ。鉄^ウ釘^ウ代^ウ木^ウ
 小^ウ舟^ウ一^ウ。牆^ウ長^ウを^ウ丈^ウ八^ウ尺^ウ三^ウ寸^ウ余^ウありし
 と^ウなる。此事西川氏の長寄夜話。及び
 華夷通高考。と^ウる^ウ増^ウ補^ウ記^ウと^ウい^ウふ。
 と^ウ比^ウ大^ウ槻^ウ去^ウ澤^ウ子^ウ一^ウ右^ウの^ウ回^ウ記^ウ紙^ウに^ウり^ウ

お^ウい^ウう^ウ其^ウ漏^ウる^ウを^ウ説^ウ。詳^ウ説^ウハ^ウ予^ウが^ウ手^ウ輯^ウ
 する所の海外異聞中^ウに^ウ収^ウめ^ウり^ウ。

○老者を殺す 巴旦

曰^ウめ^ウて^ウハ^ウ年^ウ老^ウる^ウもの^ウハ^ウ働^ウ悪^ウし^ウく^ウ役^ウも^ウま^ウさ^ウず^ウ
 と^ウい^ウふ。親^ウと^ウい^ウふ^ウも^ウ亦^ウ殺^ウして^ウ仕^ウ事^ウな^ウり^ウ。亦^ウ道^ウ
 饑^ウ饉^ウ芋^ウ料^ウを^ウ多^ウく^ウ貯^ウり^ウ家^ウめ^ウる^ウハ^ウも^ウる^ウ
 情^ウな^ウり^ウ。此^ウ國^ウ五^ウ穀^ウハ^ウ纒^ウく^ウか^ウく^ウ。こ^ウろ^ウも^ウ芋^ウを^ウ
 り^ウて^ウ糧^ウと^ウす^ウる^ウ。素^ウを^ウ以^ウ神^ウを^ウさ^ウく^ウ
 ぬ^ウぬ^ウ夷^ウぬ^ウハ^ウ討^ウ婚^ウ葬^ウ祭^ウの^ウ礼^ウも^ウな^ウく^ウ人^ウ死^ウ

りぬバ畑いかりのかさり〜埋いえ。其跡あとを踏ふ平〜
屋やとなん。

右みぎの話はなしハ寛文八年尾州おしゅう智多郡ちたぐん大野
村むらなり。孫まご右衛門ゑもんといふ者の形かたち巴且小
漂うら着き〜。移うつりの報かき難がた〜遊あそぶらぐ。幸さい
〜して彼か寫しを造つくり出で。南みなみ系けい人ひとは
扶たす助すけせられ〜。日本にっぽんへ帰かへり〜る水みづ主ぬし
どもどもの況いきさつなり。其その記録きこくハ海うみ外ほか異い聞き
申まを小裁せうさいなり。



明治廿六年六月紫原氏ヨリ来也

五册之内

尚古堂

橋本氏